きょうと福祉倶楽部だより

2023年　第３号

高齢者が自分の家で暮らすということ

有田和生

わたしの父は93歳。父は大山崎町で母と長く過ごし二人の子供を育てた家で独り暮らしを続けています。
2年前の年末には脳出血を起こし、早朝わたしにこれまでとは全く違う声の調子で唐突に「おまえには世話になったなぁ」と電話をかけてきました。
普段との声の様子が違う事で異変を感じ、すぐさま実家を訪ねるとカーテンが閉まった薄暗い寝室。そこに動けなくなった父がいました。
ただちに救急車で病院に搬送しました。そこで受けた診断で脳出血がわかったのです。
その父がわたしの顔を見て最初に病院のベッドで発した言葉は「帰ろう」です。
もう自宅に帰る意思が溢れていました。
その父をなだめ、入院を続け幸いにも軽い言葉の障がいは残ったものの無事自宅での生活に復帰しました。

自宅での生活は独り暮らしの大変さはあるものの訪問看護師やホームヘルパー、デイケアの参加、週一度は生活協同組合が出す車に乗っての買い物などを使いこなして自宅での生活をいまも続けています。
その父が先日再び体調の不良を訴えて入院することになりました。病状は下血です。大量の血液に戸惑ったのでしょう。わたしに「オムツを買って届けてくれ」と電話がありました。
「おいおい、オムツじゃ無いでしょう」とすぐさま訪問看護師に電話を入れて臨時訪問をして頂きました。
そしてやはり救急搬送をした方が良いということで看護師さんに救急車の手配をして頂きました。
入院は父には嫌なことですから、当初は拒んでいましたが入院を渋々受け容れました。
この入院もまた早期の対応ができたためか僅か1週間の入院生活で終える事ができました。この退院にもちょっとしたエピソードがあります。
月曜日、いつものように職場で仕事をしていると父から電話が入りました。普段よりハッキリした声で「退院出来るようになったから、今日迎えに来てくれるか？」「病棟の課長から電話があると思うからよろしく頼む」と。
普通退院というのは退院の許可が出てそこから退院日を決めるものですが、父にはその時間も待てなかったのでしょう。そしてその日のうちに退院です。

父の退院後の力のこもった声を聞くと、高齢者にとっては家という思い出の詰まった場所で暮らすことは命にエネルギーが注ぎ込まれるように思えます。
施設入所や病院への長期入院は暮らしの連続性を途切れさせ、エネルギーの供給を遮断することに繋がりかねません。
わたしやわたしとともに働くきょうと福祉倶楽部の仲間は父だけで無く多くの高齢者の暮らしの営みを地域で支えていきたいと思ってます。
身体が不自由になって思い出の場を離れて悲しい顔をする高齢者を見たくはありませんから。

新型コロナウイルス感染拡大に伴う利用者のみなさんへのお願い

●サービス利用中は可能な限りサービスご利用の方もマスクの着用らをお願いします。

●利用者、同居の家族のかたの体調不良（発熱など）はあらかじめきょうと福祉倶楽部までご連絡ください。

有限会社　おとくに福祉研究所
きょうと福祉倶楽部
〒617-0824
長岡京市天神4丁目7-12　ハイツ東甘101号
TEL　075-958-2560　FAX　075-957-2808
E-mail　info@fukushi-club.com